
冬の日、駅のホームにて

すず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の日、駅のホームにて

【Nコード】

N7737B

【作者名】

すず

【あらすじ】

失いたくない…それでも失ってしまう。大切なモノは永遠じゃなくって…。でも、だから大切なんじゃないのかな。

「少し……お話ししませんか？」

第一印象は『変な女』。

冬の日……俺とそいつ以外に誰もいない駅のホームで、見ず知らずの男に声をかけるのだ。

それを変と言わずなんと言おう。

年齢は俺と同じか少し下、低めの身長と細身の体は小動物を連想させる。

いかにもおとなしそうな『儂い少女』が第二印象だった。

変な女は俺の返事を待つことなく、隣の席へと腰掛けた。

その表情は明るく、良い暇潰し相手が出来た……なんて言いたそ

うにしている。

思わず溜め息を洩らしそうになったが、そんな事しても気が滅入るだけと考え直し、寸手のところでやめる。

そんな俺の心情を知ってか知らずか、少女はこちらの顔を覗きこんで

「今日は寒いですねー」
と、楽しそうに言った。

「ああ」
気のない返事を返しながら、二時間先の事を考えてちょっとブルブルになる。

「今日はどちらへ？」

少し赤みがかった、それでも俺よりだいぶ白い色をした小さな手へ、はぁーっと吐息を吹きかけながら脳天気にも口を開く少女。

「実家」

素気なく答える。正直なところ、この話題にはあまり触れてほしくない。

だが、そんな事はおかまいなしと言わんばかりに、少女は残酷な質問を繰り返した。

「帰省……って時期じゃないですよ。何かあったんですか？」

普通初対面の人間に対して、こんな突っ込んだ事は聞かない。プライベートとか、そういうのも有るわけだし……。

だから俺も無視すれば良かったのに……。

何故か、言いたくなかった『その事』を、目の前の少女に向かって話してしまった。

「……ばあちゃんが死んだ」

ストレートに言い放つ。本当に、なんで俺こんな事を、こんな訳の解らない女に言ったんだろう？

自分でも不思議に思うが、言ってしまったモノはしょうがない。

しばし沈黙。

空気の重さに耐えきれず、自ら話題を変えようとしたちよつどその時、少女は予想だにできなかった言葉を発した。

じゃあ、私と一緒にですね？

「なっ」

「冗談だろ？なんて言おうとした俺は、しかし少女の真剣なその眼差しに言葉を詰まらせた。

本当……なのか？

「私の所はお父さんです」

静かに、少女は澄んだ声で言った。

「事故だったんです……交差点で、車が信号を無視して……」

あっけないですよね……と小さく呟いた。

「お父さん、優しかったなあ……」。

私が五つの時、すごく可愛いお洋服を買ってくれて…私、嬉しくってすぐに着てみたんです。

そうしたら全然サイズが合ってなくて……

ごめんね、ごめんねって何度も何度も……

本当に、優しくして……」

言って彼女は宙を見つめる。

冬の澄んだ空気は、亡くなった父を語っていたソイツに、少しだけ似ている気がした。

透明で儂いのに、どこか張りつめていて……。

僅かに憂いを含んだ表情を見せるのも束の間、すぐに先程の笑顔に戻った。

「人間って……弱いですよね」

少女は言った。

その言葉の真意が何なのか、それを理解する事は出来なかったが、かといって否定する理由もない。

俺は首を縦に振った。

「お父さんはずっと居てくれるんだって、自分勝手に思い込んでいつかは居なくなるって解ってたつもりで、その『いつか』を知らず先伸ばしてる。」

そんな事は許されるワケないのに、ソレが永遠に続くものだって……。
ふふ、おかしいですよ？子供じゃないのに、こんな考え」

彼女は寂しそうに微笑むと、本当に私って馬鹿だなあと続けた。

俺はふと、死んでしまったお婆ちゃんの事を思い出していた。

小学校に上がったばかりの頃、お祝いによってランドセルを買ってきてくれたお婆ちゃん。

お母さんが仕事の時、お昼ごはんを作ってくれたお婆ちゃん。

俺の成人式までは死んでも死ねないって、そう言っていたお婆ちゃん。

だから、お婆ちゃんは居なくならないって……そう思ってた。

誰にでも等しく訪れるのに、この人だけは……なんて。
例外なんてあるわけがないのに、それでも例外を信じてる。

なんて馬鹿な幻想。

怖いからって目を反らして、ありもしない考えに逃げてる。

自分が死ぬ筈ないって……この人が死ぬ筈ないって！

脆く、か細い幻想を抱いて……死を忘れて生きている。

だから、人間は弱いのだろう。

「俺も……そう思ってた」

ポツリと小さく呟いた。

消え入りそうな声だったけど……それは、彼女の耳に届いたらしい。
こちらへ顔を向けて、僅かに微笑んだ。

「時間って、不思議ですよね……」

唐突にそんな事を言い出した。

「先に産まれた人からどんどん居なくなつて、新しく産まれた人達もやっぱり時が経てば死んでしまう。

その時は悲しくても、時間は人を慰め、癒す。

人はそうして空いた穴を、別の何かで補つて……。
お父さんも私も忘れられて……それでもセカイに変化はなくて、人はヒトとして生きていく」

「詩人みたいだな」

素直に思った。

「えへへ、ちょっとくさいですよね」

照れ笑いを浮かべる少女。

「寂しいけど……そんなモンじゃないのか？ 現実ってヤツは」

あがいて、もがいて、それでも結局は死んでしまっ。

時は移ろい、永遠なんてないと俺達に言い聞かせる。

それはもう、どうする事も出来ない……動かしようのない真実。

だからこそ、俺達に出来るのは日々を精一杯に生きる事だと、誰かが言っていた。

綺麗ごとだと否定するヤツも居るが、俺はわりと正解なんじゃないかなと思う。

俺が幸せなら、それが一番だと言ったお婆ちゃんは……幸せだったのだろうか？

それを確かめる事は出来ないけど……せめて俺はお婆ちゃんを忘れることのないようにしよう。

自己満足だけど、それが俺に出来る恩返しだと思うから。

「……」

静けさを含んだ北風が、俺の頬を撫でた。

澄んだ空気は肺を満たして、吐息は白く空に昇っていく。
重く垂れ込めた雲は、今にも雪を降らせそうだ。

時計の針は、正午を指そうとしている。

「あの……上りですか？」

突然そんな事を言った。それは『貴方の乗る電車は上りですか？』
という意味と捉えて良いのだろうか？

「ん、俺は上りに乗るつもりだけど……」

とりあえず答えておく。すると、少女は明るい笑顔を浮かべて言
った。

「良かった……」。

あの……もしよければ……その……私と……賭けをしませんか？」

何を思ったのか、不意にそんな事を言い出した。

しばしの沈黙。

それを了解と勘違いしたのか、彼女は続きを話しだした。

実際にはイマイチ頭がついていかなかったただけなのだが……。

その楽しいげな様子を見たら今更ダメとか言えなくなってしまった。

「賭けの内容は……どちらの電車が先に到着するか？負けたら何で
も一つ、言うことを聞くって事で……」

一瞬、啞然とする。

電車の到着時間なんてダイヤで決まっているのだから、わざわざ賭けにする程の事じゃない。というか賭けになっていない。

おまけに、この駅はちよくちよく利用していたのだ。大体の到着時間は暗記している。

つまり……。

絶対に負けない勝負……？

「あ、時刻表を見てくるのは反則ですよ？」

思い出したかのように付け加える。

無論、こちらにその気はない。

なんたって頭の中に入っているのだから。

とは言ったものの……。

実際のところ、ちよくちよく利用していたのはガキの話であ
って、その記憶に絶対の自信があるかと問われたら、ないと答える
だろう。

記憶なんて意外と曖昧なモノだし、自信なんて持てる筈はない。

ない……のだけど……。

こう、なんて言うのだろうか？

いわゆる潜在意識に、刷りこまれているというかなんというか。

『上りは正午、下りは三分遅れ』というのが、頭に浮かんでくるの

だ。

この記憶が正しければ、俺が乗る電車は正午、彼女の電車は十二時三分ということになる。

うん、きっとそうだ。

子供の時の事ってわりと憶えてるし、三子の魂百までって言うし。

大丈夫、自信を持つんだ俺。

そんな俺の無意味な葛藤も、正午ちょうどに鳴り響いたアナウンスによって掻き消えた。

「まもなく、一番ホームに下り電車がまいります。
黄色い線の内側に……」

何？

聞き間違いではない。

アナウンスは確かに『下り』と、そう告げた。

「賭けは……私の勝ちですね」

少女は立ち上がって俺の正面まで来ると、そつと言葉を紡いだ。

「明日、同じ時間に……駅前集合です!!」

今までで一番の笑顔を浮かべると、足早にホームの反対側へと行
ってしまった。

到着した電車の駆動音の合間、風に乗ってその声が届いた。

「ダイヤ、変わったんだよ……去年から」

消えそうなの、でも力強い声は……。

いつか聞いた、アイツの声に……似ていた

扉が閉まる。

電車の去った静かなホームにポツリと取り残された俺は、一人……

…空を見上げていた。

「本当に、時間って不思議だな……」

時の流れは、ああも人を変えるモノなのか。

「まったく……あれじゃ詐欺だ」

「ごちて、思わず笑ってしまった。」

今日の事を考えると気は重たいが、明日に比べりゃマシだろう。

厄介なヤツに会っちゃまった

ついに降り出した雪が、ポツリポツリと地面に落ちて……。

上り電車がホームに到着した頃。

俺は、忘れていたアイツの面影を思い出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7737b/>

冬の日、駅のホームにて

2010年10月11日20時16分発行